

齋藤茂吉編

長塚節研究

卷上

筑摩書房刊

近代作家研究叢書28 監修・吉田精一

長塚 節研究 上

1984年3月25日第1刷発行

1990年1月30日第3刷発行

編者 斎藤茂吉

解説者 大戸三千枝

発行者 高野義夫

印刷所 モリモト印刷株式会社

製本所 東和製本株式会社

発行所 株式会社日本図書センター

東京都文京区大塚3-4-13

電話03(947)9387 振替東京2-8206

落丁・乱丁本はおとりかえします。 定価4,120円(本体4,000円)

ISBN4-8205-0338-3 C1395 P4120E

長塚節研究 上 目次

序（齋藤茂吉）

凡例

長塚節の歌……………齋藤茂吉

長塚節歌集合評

一 根岸庵、森……………六七

二 吉野園、讀平家物語、瀧……………七四

三 霞が浦、日々の歌……………八二

四 ゆく春……………八八

五	うみ亭集……………	九三
六	悼正岡先生、國見山……………	一〇二
七	菩提樹、初雪……………	一一〇
八	桜の芽、春雨……………	一一七
九	まつかさ集其一……………	一二三
十	西遊歌……………	一三一
十一	西遊歌（續）……………	一三九
十二	西遊歌（續）……………	一五〇
十三	西遊歌（續）……………	一五九
十四	西遊歌（續）……………	一六五
十五	西遊歌（續）……………	一七二
十六	西遊歌（續）、松かさ集其二……………	一八二
十七	雜咏十六首、榛の木の花……………	一八九

十八	春季雜咏、夏季雜咏其一	一九六
十九	夏季雜咏其二其三	二〇四
二十	憶友歌、秋冬雜咏	二一二
二十一	秋冬雜咏（續）	二二二
二十二	淺間の雲、霜	二二九
二十三	春季雜咏	二三五
二十四	房州行	二四一
二十五	炭焼くひま、諏訪の歌會	二四九
二十六	羈旅雜咏	二五五
二十七	羈旅雜咏（續）	二六四
二十八	羈旅雜咏（續）	二七五
二十九	羈旅雜咏（續）	二八五

三十	羈旅雜咏(續)	二九七
三十一	羈旅雜咏(續)	三〇八
三十二	亂礁飛沫、青草集	三二四
三十三	青草集(續)	三三五

長塚節の歌

齋

藤

茂

吉

長塚^{ながづか}節^{ふし}氏は、明治十二年四月三日茨城縣下總國結城郡岡田^{おかた}村國生^{くにやう}に生れた。國生小學校下妻^{しもつま}小學校を卒業し、縣立水戸中學校に入學したが、神經衰弱様の病氣のため中途退學した。明治三十三年三月はじめて正岡子規を訪ひ師事するに至つた。子規歿後諸同人と共に雜誌馬酔木^{かしひぎ}の編輯人となり、アラragiが發行になつてからもやはり指導的位置にあつた。長塚氏は歌ばかりでなく、寫生文から小説に入り、短篇に炭焼の娘、芋掘り、開業醫、隣室の客、おふさ、教師等があり、長篇に土がある。明治四十四年十一月、喉頭結核の診斷を受け、大正四年二月八日九州帝國大學附屬醫院で歿した。享年三十七、法諡を秀岳義文居士といふ。

歌人の竹の里人おとなへばやまひの床に繪をかきてあり

荒庭に敷きたる板のかたはらにふる鉢ならび赤き花咲く

生垣の杉の木ひくみとなり屋の庭の植木の青芽ふく見ゆ

茨の木の赤き芽をふく垣の上にちひさき蟲の出でて飛ぶ見ゆ

ガラス戸の中にうち臥す君のために草萌えいづる春を喜ぶ

此等は明治三十三年はじめて子規庵を訪ねた時、その席上で詠んだものである。長塚氏は「歌よみに興ふる書」の文句を語記してゐたり、子規先生の歌を殆ど皆語記してゐたりしたものだから、先生も甚だ喜

ばれたといふことであつた。この即事の歌といへども、よく竹の里人の歌の呼吸を吞込んで、素直に率直に歌ふことを知つて居るのである。

然らば突如としてこの域に到つたのかといふに、さうではなく、中學生の頃から獨りで歌を作りはじめ、従来の歌風即ち桂園流に近いやうなものを作つてゐた。然るに正岡子規が日本新聞に據つて新派和歌の運動を開始するに及んで、少年ながらその運動に共鳴し、心を傾けて子規の作を読み、子規の歌論を熟讀して、子規を訪問するに至るまでには大體の決心がつき、この席上吟ほどの力量は出来て居たのであつた。

子規訪問後、日本新聞の募集に應じ、森、讀平家物語、瀧等の歌を作り、やうやく萬葉を取入れ、師承の手心をおぼえつつ、『押し照れる月夜さやけみ鳥網張る秋田の面は霧たちわたる』『くれなゐに染みしぬるでの鹽の實の鹽ふけり見ゆ霜のふれば』等の歌を作つて居る。このあたりから手堅い中に鋭敏なこの作者の手法を見ることが出来、萬葉調を取入るにしても、ただ漫然と取入れるのでなしに、その時その時の内容に應じて必要にして缺くべからざるものを取入れて居るやうに見える。

青傘あおいがさを八つさしひらく棕櫚しゅうろの木の花咲く春になりきたらずや
穂ほの芽のほどろに春のたけゆけばいまさらさらに都みやこし思ほゆ
荒小田あらせでをかへでの枝に赤芽吹き春たけぬれど一人こもり居
都邊みやとを戀こひひておもへば白櫻しろおうの落葉掃きつつありがてなくに
思ふこと更にも成らず枇杷の樹の落葉の春に逢はくさびしも

春畑の桑に霜ふりさ芽立ちのまだきは立たずためらふ吾れは
くさまくら旅にも行かず木犀の芽立つ春日は空しけまくも
にこ毛立つさし穂の麥の招くがね心に思へど行きがてぬかも

おもふこと櫓のさ枝の垂花のかゆれかくゆれ心は止まず

これは明治三十五年四月の作で、『四月の末には京に上らむと思ひ掛けしことの叶はずなりたれば心悶えてよめる歌』といふ詞書がある。この一聯は病牀にある子規を喜ばしめたもので『このごろ急に歌の上手になつたのは長塚だ』といひ、その結句がいづれも緊まつてゐてよいと褒めて居る。それから、『荒小田をかへでの枝に』とか、『おもふこと櫓のさ枝の』とかいふ言掛け、それから、『垂花のかゆれかくゆれ』といったやうな序詞にも子規は面白味を感じ、それよりも若葉するいろいろの樹を咏込んであるので、一層の面白味を感じたのであつただらう。子規生前の同人の歌としてはまことに珍しいもので、これはこの作者の創意に成つたといふべきものである。さうしてこの創意は、後年の「寫生の歌」に發展して行くのである。

今思へば、『青傘を八つさしひらく』といひ、『櫓の芽のほどろに』とか、『かへでの枝に赤芽ふき』とか、かういふ洗煉された技法が何處から來たかとおもふ程であるのに、一般の歌壇の人から見ればただ擬古の道をたどつて居るに過ぎぬやうに見えたのであつただらう。さうして、『秋風はいまか吹くらし小林に刈らでの芒穂にいでそめつ』『千葉の野を越えてし來れば蜀黍の高穂の上に海あらはれぬ』の如き立派な歌が殆ど一般歌壇の話題にものぼらなかつたのであつた。

ささぐべき栗のここだも搔きあつめ吾はせしかど人ぞいまさぬ

吾が心いたも悲しもともすりの黍きびの秋風やむ時なしに

秋風のわたる黍きび野を衣手のかへりし來れば寂しくもあるか

青雲の棚引くなべに目かげさし振りさけ見れば都はとほし

これは等は「悼正岡先生」の中から抜いた。『九月十九日、正岡先生の計いたる、この日栗ひろひなどしてありければ』といふ歌、初七日に上京墓参の時の歌、三七日に郷里に居て咏んだもの等である。師をおもふ情の切々たるものがあり、言葉も自由でこだはつてはゐない。

二

子規歿後同人等の歌は雑誌心の花、日本新聞等に發表してゐた。そのうち雑誌馬酔木あしびが發行になり、同人等は多くその方に發表するやうになつた。

朝さらすつぐみ鳴くなる我が藪くさの桜さくらの木みれば萌えにけるかも

春雨の日まねくふれば桜の木の萌えてほうけぬ入りも見ぬとに

春雨に濡れつつたらは折らめどもをりきと告げむ人のあらなく

ほろほろと落葉こぼるるゆづり葉の赤き木ぬれに春雨ぞふる

春の夜の枕のともし消しもあへすうつらうつらにいねてきく雨

此等は亡師を背景にしてその感慨を歌つたものが多いやうである。例によつて丁寧でこまかい歌が多い。『あふぎ見る眉毛まゆげにかかる春雨に傘さしわたる月人つきひとをとこ』などはこの作者の時々用ゐる譬喩的技法で、それが具象的に運ばれ居るので厭味に墮ちてはゐない。

青桐のむらなる莢さやのさやさやに照れるこよひの月の涼しさ

ふくろふの宵々なきし榎えんの樹のうつろもさやに照る月夜かも

秋の夜の月夜の照れば樟くすの木のしげき諸葉もろはに黄金こがねかがやく

秋風のはつかに吹けばいちはやく梅の落葉はあさにけに散る

青桐の實の莢、榎の大樹のうつろに月の照るところ、樟くすの木の諸葉に月光が差して黄金いろに見えるところ、もう秋風が立つて梅が落葉するところ、さういふ樹木を機縁として、作者の心境をいひあらはして居るのである。師の歿した翌年には既にこの進境を示すに至つた。そして郷里にあつて田園に親しみ、時たま上京して歌友に會ふぐらゐであるから、心境を亂されることも少なかつたのであらうが、自分の境界を凝視して、それを守つて居られた作者は、それゆゑ一面に非常に強いところのあつた人といふことが出来る。

三

ここに明治三十六年夏の歌に、「西遊歌」といふ旅行歌がある。これは京都大阪から比叡山、大和の萬葉

名所、伊勢神宮、熊野、那智、本宮、鳥羽、三保に至るまでの旅行であるが、なかなかの大旅行であつて、明治三十八年の「歸旅雜詠」と共に、歌境の一發展であつた。この旅行の歌は、西行、芭蕉、子規等の傳統とも云ひ得るが、長塚氏のも止むことを得ずば汽車汽船に乗つたが、なるべくは草鞋脚絆で徒歩旅行をした。これは旅行中歌材を求むるといふ理由にも因つたが、旅行自身に歌境を進展せしめる潜勢力の如きものがあると考へてゐたことに因つた。そして作歌態度の根本が「寫生」にあつたから、小手帳に出來次第歌（未完成のもの）を書きつけ、發表するに際しそれを推敲したのであつた。

あふちの枝もうごかず暑き日の庭にこぼるる白萩のはな 泉布観
畝なみに藍刈り干せる津の國の安倍野を行けば暑しこの日は

大ふねの舳の松の野の穂芒は陵のへになびきあへるかも 舳の松
和泉は百舌鳥の耳原耳原のみささぎのうへにしげる杉むら 仁徳御陵
うなねつき額づきみればひた丘の木の下萱のさやけくもあるか

雨ないたくもちてな寄せそ茅渚の海や淡路の島に立てる白雲 舳の松にて
住吉の磯こす波の夕なぎに驚とびわたれむら松がうれゆ

さびしらに蟬鳴く山の小坂には松葉ぞ散れるその青松葉 清閑寺道

比叡の嶺ゆ振りさけみれば近江のや田上山は雲に日かげる

天霧ふ思吹の山は蒼雲のそぐへにあれどただに見つるかも 伊吹山遠望

近江の海八十の湊に泛く船の移りも行かず漕ぐとは思へど

鞍馬嶺ゆ夕だつ雨の過ぎしかばいまか降るらし滋賀の唐崎

かういふ歌である。なるべく少く抄しようとしてもこのあたりの歌は殆ど皆取ることの出来るもののみである。第一歌材が皆新しいのに、言葉が自由自在で、どうして古語を斯くの如く達者に使ひ得たかとおどろく程である。棟梅檀の枝が日さかりで全くその動きを止めたやうな時に靜かに白萩の花がこぼれて居るといつたやうな自然界の不思議な現象を捉へ、それから小坂に松葉の散るところだの、鞍馬山の夕立雨だの、さういふ自然界の動運の相を捉へて的確に表現することに妙を得て居る。それから、『木の下堂のさやけくもあるか』の古意古調、『そぐへにあれどただに見つるかも』の淳朴無雜は、この旅行吟の非常な強みになつて居る。なほ續いて抄出する。

さやさやに水行くなべに山坂の竹の落葉を踏めば涼しも 嵐山

春日野の茅原を暑み森ふかくこもりにけらし鹿の見えこぬ 奈良

見れど飽かぬ嫩草山に夕霧のほのほのにほふ草萩の花

ゆふ月の光り乏しみ樹のくれの倉梯山にふくろふの鳴く

味酒三輪のやしるに手向けせむ臭木の花は翳してを行かな

櫛御玉大物主の知らしめす三輪の檜原は荒れにけるかも

耳成の山のくちなし樹がくりに咲く日の頃は過ぎにけらしも

葦はらや八百湧きのぼる満潮の高知りいます神の大宮 檜原神宮

檜原の神の宮居の齋庭には葦ぞおひたる御井の眞清水

たびびとの逝回ひさぎの丘かみの小島こしまには煙草の花は咲きにけるかも

これ等の歌を一々分析しようとおもはぬが、この作者は實地に臨んで、ものを捉へることのいかに旨いかといふことに氣づくのである。それには讀者も亦同じやうな旅行をしてゐると假定して、自分で作歌すると假定して、此等の歌の妙味を悟るべきである。さうすれば『樹いのくれの倉梯山にふくろふの鳴く』でも、『臭木の花は翳してを行かな』でも、『山のくちなし樹がぐりに』でも、『煙草の花は咲きにけるかな』でも、さう簡単に片付けてしまふわけに行かぬことが分かるのである。『満潮の高知りいます神の大宮』に至つては、これはまた煙草の花の歌などとは別様に調べの高いものである。作者はさういふ方面にも非凡の才のあつたこと、後出の歌がそれを十分に證明して居る。

やま桑の木津きつのはや瀬せののぼり舟網ふなづな手かけ曳く帆はあげたれど 木津川

日をへつつ伊勢の宮路に粟の穂の垂れたる見れば秋にしあるらし 伊勢路

蘿れん蒸せる杉の落葉のこぼれしを白丁よぼろはひりふ宮の垣かきつ内に 内宮

加布良古かふらこの三崎の小門せどを過ぎくれば志摩しまの浦曲うらまに浪立ち騒ぐ 熊野へ

大和嶺やまとみねに日が隠るへば眞藍まゐろなす浪の穂ぬれに文鯨魚ふみづうの飛ぶ見ゆ

萬葉や古事記の句を巧に應用し、その聲調を體得し、古調と新材料とを融合せしめた手腕は寔に驚くべきである。

内宮では白丁が杉の落葉をひろふところまでかりそめに取扱つてゐない。山桑やまそうは即ち山帽子やまぼうしで私も可憐なる實として愛するものであるが、この作者も既にこれを愛して、『やま桑の木津のはや瀬の』として枕